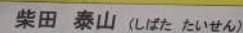


オススメ本コーナー

ス×本)

今回ご紹介いただいた三康文化研究所研究員は…！



專門分野:中国仏教、浄土宗学

月曜日に九州から都内へ出勤されることが多く、時折、三康図書館にも顔を出していただきます。

いつも明るく、楽しい先生です。

研究員サスヌ本コーナーは、全17回をもちまして終了となりますが、研究員6名中、最多の7回ご執筆いただきました。

私のオススメ本

[illegible]

従来、大乗仏教は「まず新しい教団が生まれ、その人たちが經典を作った」と考えられてきました。しかし著者は、順序が逆だと言います。まず「文字が書かれた」といふのが、その經典を読み、伝える人々の輪から、その団や文化が生まれた、と。經典が仏教を動かしたのではなく、なぜ文字がそれほど必要だったのか、と。

なぜ文字がそれほど大きな力を持ったのか。声で語られた教義は、語り手がいなくなれば消えてしまします。しかし文字になった言葉は、書き立ち現れる。読む人は經典の世界に入りこみ、そこで仏と出会い、仏弟子になる。大乗經典は、こうした体験を超二装置として、意識的に作られ、増やされ、書き直されていったのだと著者は説きます。

さらに本書は、この見方を現代にまで引き伸ばします。仏典が口伝えから写本へ、写本から印刷へ、そしてインターネットと媒体を変えてきた歴史そのものが、仏教の歴史そのものではないかと、著者は説きます。師の言葉は、それを受けとる弟子の歴史そのものではないかと、著者は説きます。

著者は、このように述べています。過去と現在の間に、仏教は生き続けているので

「いい素朴で普遍的ですね。書かれた言葉は、人に何を
もたらすか。仏教に関心のある方はもちろん、本や言葉の力につい
て考えたい方にも、深い示唆を与えてくれる一冊です。」

五、イム教とエクリチュール ー大乗経典の起源と形成』(三蔵図書館請求記号: 183.08-Sh51)

仏教とエクリチュール
大乗經典の起源と形成

下田正弘 (著)
SHIMODA MASAHITO

東京大学出版会

これまでの研究員オススメ本コーナーをふりかえって
担当者の感想

研究員オスメ本コーナーは、6名の研究員と図書館員の交流も兼ねて2019年にスタートしました。2027年までの8年間に17回開催できましたのも、研究員のご協力の賜物です。誠にありがとうございました。最初は「研究員の書きたいことを三庫図書館で所蔵している本や雑誌の紹介を入れてください。」とお伝えしていましたが、次第に、公開講座を担当する研究員に「公開講座に関連している三庫図書館で所蔵している本や雑誌を紹介していただく」コーナーに変わっていきましました。これまでの紹介本を振り返ると、研究員の関心のあるテーマが浮き彫りになります。1回、3ヶ月の長期期間の展示をする中で、研究員の顔が見えるコーナー、手に取って読んでみる解説文の作成に取り組んでみました。今回の第17回をもちましていよいよ最終回となりました。これまでご覧いただきまして誠にありがとうございました。最後までどうぞお楽しみください。

私のオススメ本

柴田泰山
(三康文化研究所研究員)

大蔵経を含め、仏教の経典は、お釈迦さまの教えを弟子たちが書きとめたものと、多くの方はそう思っているでしょう。ところが大乘仏教の経典は、釈尊の死後、何百年もたってから次々と生み出されました。誰が、どこで、なぜ書いたのか。この「仏教史最大の謎」に、まったく新しい角度から迫ったのが本書です。著者の下田正弘氏は、東京大学でインド仏教を研究し、大蔵経（仏典の集成）のデータベース化を主導してきた研究者です。本書では、フランスの哲学者デリダの「エクリチュール（書かれた言葉）」論を手がかりに、大乘経典を「歴史のなかの記録」としてではなく、「読む人の心のなかで働く言葉」として読み直します。

従来、大乘仏教は「まず新しい教団が生まれ、その人たちが経典を作った」と考えられてきました。しかし著者は、順序が逆だと言います。まず「文字で書かれた経典」が現れ、その経典を読み、伝える人々の輪から、あとになって教団や儀礼が生まれた、と。経典が仏教を動かしたのです。

なぜ文字がそれほど大きな力を持ったのか。声で語られた教えは、語り手がいなくなれば消えてしまいます。しかし文字になった言葉は、書いた人の身体を離れ、いつでも、どこでも、誰の前にも「仏の声」として立ち現れる。読む人は経典の世界に入りこみ、そこで仏と出会い、仏弟子になる。大乘経典は、こうした体験を起こす装置として、意識的に作られ、増やされ、書き直されていったのだと著者は説きます。

さらに本書は、この見方を現代にまで引き延ばします。仏典が口伝えから写本へ、写本から印刷へ、そしていまデジタルへと媒体を変えてきた歴史そのものが、仏教の歴史なのだと伝えています。師の言葉は、それを受けとる弟子がいてはじめて完成するものであります。過去と現在のあいだに人と人の場が生まれるところに、仏教は生き続けているのです。

専門書ですが、問いは素朴で普遍的です。「書かれた言葉は、人に何をもたらすのか」。仏教に関心のある方はもちろん、本や言葉の力について考えたい方にも、深い示唆を与えてくれる一冊です。